
魔王様と宇宙人

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様と宇宙人

【Nコード】

N3159Y

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

魔王様が謁見の間で報告を受けていると、窓一面に巨大な飛来物が突っ込んできた。

巨大な飛来物から現れたジャスミンなんとかと、ものぐさな魔王様とのラブにならない物語。（全五話予定）

巨大飛来物到来

謁見の間にて魔王であるジスノウジャは背筋に悪寒が走り、急に立ち上がった。

「陛下？」

「嫌な予感がする」

クールと言えば良く聞こえるが、ただの無表情の物臭。しかし、その顔は魔界広しと言えどそう簡単に見られない程に美しく、一般の臣下からは謁見の間にて淡々と部下達の報告を聴く姿は憂いを帯びていてなお美しいと評判だ。

ただこれが側近になると話が別らしく憂いを帯びていてではなく、ああ面倒くさいと顔に文字が浮かんでくるのではないかと心配するほどに魔王様は物臭の面倒くさがり。

そんな面倒くさがり魔王様が謁見中に立ち上がった。それだけでも大事件である。

ボン！

爆発音してピンクの煙が魔王の椅子を覆い隠した。

「陛下！」

「うむ。我は暫しこの姿でいる。嫌な予感で全身に鳥肌が立っておるわ」

魔王様と言えはしなやかに艶やかにそれはもう美しい髪に化粧？何それ？な輝かしいお肌。スツと通った鼻に口元は少し薄めで笑うとニヒル。黒い瞳は研ぎぬかれた黒曜石。その目に流し目されれば

老若男女問わず倒れる程。

見事な長身の八頭身で上半身と下半身の割合は四・五対五・五と見事に足が長い。

と、ここまで讃美の言葉を列ねてきたがただいまピンクの煙から出てきた魔王様と言えば……それはそれはお可愛らしい。

二頭身であつた。

「魔王様あ！」

「陛下あ！」

二百年に一度くらいの割合でこんな状態になってしまふ魔王様（仕事も何もかもが面倒になるとこの状態になるらしい）。

二頭身で可愛らしいのだが、ちまつと椅子に納まる様子に麗しの陛下が大好きな臣下達は涙を流して悔しがっている。中にはこの二頭身陛下の方が好きと悶える者も少々いるが、この謁見の間にいる者は大半が泣いていた。特に側近達と宰相が。仕事が遅れると……

「来る！」

シュタつと椅子から降りて窓をじつと見ていた魔王様は手のひらを窓にかざした。

魔族達が見たこともない巨大な円形の硬質な物体が外から謁見の間に向けて高速で飛んできている。

悲鳴が上がり、力がない魔族達は窓とは反対側の壁に避難し、力ある上位貴族や側近らは魔王様の両脇を固めるように魔族達と物体の合間に立ち魔王様とともに対物防御の障壁を展開した。

形容しがたい轟音が響き渡り、障壁に辛うじて止められた物体は謁見の間の三分の一を埋めていた。

「陛下！ ご無事ですか？」

上位貴族や側近らが魔王様を囲むようにして無事を確認していると、物体の一部が無音で開く。

「うつわ！ やっぱあい！ 現地と接触どころか城破壊とかやつばあいよね？ リっちゃんに殺される」

中から何かが転がり出るといふ比喩を使える勢いで出てきた。魔王様以下、魔族達は勿論身構えた。

「うつわ！ かあわいいー！」

「離せ！」

出てきた何かは魔王様を魔王様を囲む魔族から奪い去り頬擦りをしている。因みに魔王様はわたわたしている。

「やあーん。じたばたしてるうー！」

じったばったと苦し気にその人物の腕から抜け出そうとしている魔王様は二頭身陛下ラブな臣下にはたまらない可愛らしさだったとか。

「それにしても老若男女、美男美女揃い。美味しそうー」

魔王様を固く固く固くハグしたまま、その人物は周りを見回した。あまりにも不穏な一言に魔王様はキレた。

「世の臣下に手を出すでない痴れ者が！」

この一言に魔王様激愛の魔族は魔王様に愛されていると一同泣いたらしい。

そんなこんなで魔王様は椅子に戻り、破壊された謁見の間で魔族が並ぶ中、魔王様を抱き潰していた人物が魔王様の前に側近に脇を固められて正座していた。

「ジャスミン・ティード・ガルバロス・ディード・カルマ・サバラク・アムラーヤと言います。こちらの星の監視官だったのですが、船の調子が悪くなってしまったので、こちらに不時着したのです。この度は城を破壊して申し訳なくうーえーっとお、ああ！ とりあえず二週間……現地時間で十日で救援が来るので暫しお世話になります。ありがとうございます」

魔王様が何も言わないうちにジャスミンと名乗る宇宙人が魔王城の客人となったようだ。

魔王様以下全員が「まだ許可も何も言っていないだろう」と、心の中で総ツツコミしていたことに魔族って仲いいなあと微笑ましく思っべきだろうか？

こうして魔王様の居城に一人の客人が現れたのだった。

陳情 1

魔王様の近衛騎士の一人に無類の酒好きで飲んでも枠に飲ませて
いるようだと言われる酒豪がいる。

人狼族でありながら、酒好き故にとある人里の守護までしている
魔族として上位種族の彼がジャスミンなんとかと言う天から降って
きた巨大な物体から現れた人物が客人（居座りとも言う）となった
次の日に真っ青……毛むくじやらなので顔色は分からないが、とに
かく精彩をかいて登城した。

「ジル、どうしたのだ？」

未だにちまつこいままの魔王が部屋の前に控える人狼を見て聞い
た。因みに魔王様は浮遊の術（小さい時は基本的にこれで移動）で
人狼の頭よりも高い位置で浮いている。

「昨夜、勤務終了後、行き付けの飲み屋へ向かって、酒を飲んでい
たのですが、あのジャスミンなんとかがふらりときてまして、隣り合
わせになったのです。気がついたら競い合いになっておりまして…
…お恥ずかしながら酔い潰れてしまいました」

「ジルを潰した？」

側近の一人に淫魔族のサリティンが非常に嫌そうな顔をして顔
を青くしている他、魔王様と一緒に現れた近衛騎士隊長も驚きを隠
せない。

魔王様以外にジルを酒飲みで潰せた者が居ないのだ。

「あつ！ ジルたん、おっはよー！ また飲もうねえ」

そこへ軽快なスキップでやってきた通称ジャスミン。雪のように白い肌はツヤツツヤとし、蛍石の様な不思議な瞳の周りは充血を知らない白さだ。

「ジャスミンなんとか！ ちょっと来い！」

魔王様がジャスミンを背中から蹴飛ばし執務室へと蹴り入れた。

「今後、魔界にて酒の飲み比べは止めてもらおう。ジルがあの調子では仕事にならぬわ」

「えー」

「えーではない」

魔王様への周囲からの見えない陳情は見事に通じたようである。

魔王様のお説教は昼過ぎまで続いた。——魔王様は説教が好き？

陳情1（後書き）

ジルよ。近衛なのに不審者^{ジャスミン}がいるのに居酒屋行っちゃっていいのか！

裏設定。ジルは魔界でも屈指の飲んべえで魔王様と張り合える逸材ながらも魔王様は飲み過ぎも面倒と酒一杯しかジルに付き合っ
てあげない。（魔王様……部下に付き合っ
てあげるのか）

陳情 2

魔王城に宇宙人が居座って三日目。

「どうしたのだ？ ゲオルグ」

魔王様の執務室への扉の前で膝を抱え込み蹲る大きな山……もと
い一つ目巨人族のゲオルグ。

巨体も巨体。立っていれば約八メートルの巨体。

膝を抱え込んでいる姿はまさに小山。扉の半分を隠している。そ
んな巨体なものだからしくしく泣いているのが鬱陶しい。

魔王様は魔王にも関わらず臣下を大切にする。まあ、不和が生じ
れば面倒が起きるからだが、魔族一人一人の名は覚えているし、人
間とも友好的とは言わずとも敵対はしていない。そんな魔王様故に
魔王様はゲオルグを心配するのだ。

「魔王様……俺……目が悪い……目が悪い、一つ目巨人……ただの
でかぶつ……魔王様……俺……消して欲しい」

「……………ゲオルグ、誰に苛められた？ 遠慮なく言え」

ゲオルグはナイーブでうたれ弱かった。なのでゲオルグについて
周囲は細心の注意を払って接していた。もちろん魔王様も。

「謁見の間……………」

「あいつか！」

落ち込んだゲオルグは非常に面倒くさいのだ。

「それで何を落ち込んでおるのだ」

魔王様はふよよとゲオルグの顔の前まで飛んでいき、頬の辺りを二頭身の小さな手でぺちぺち叩きますとゲオルグは顔を上げて魔王様を見ます。

魔王様を見つめる円らな目から大粒の涙がボトボトと流れるのを魔王様はボフンと元の姿に戻り頭を撫でてゲオルグを慰めました。

「泣くでないよ。魔族の子。お主等の平穏無事が魔王の願いだ。さあ泣くのを止めて事情を話すのだ」

魔王様は魔族には大変お優しいのです。

泣いている一つ目巨人ゲオルグは途切れ途切れに事情を説明しました。

昨夜、ゲオルグが謁見の間の警護当番で扉の前に立っていると、ジャスミンなんかがふらりと現れて、ゲオルグに「視力検査しよう」と告げた。

視力検査と言えば片目隠して片目の視力を測るものだ。よく考えてみよう。いや、考えてみなくても「ちよつと待て」と言いたくなる。ゲオルグは一つ目巨人族。つまりは片目を隠すどころか目は一つしかない。

ジャスミンなんかは、あろうことかゲオルグの目を隠し、こう言った。

「これは何と読むのでしょうか？」

話を聞いた魔王様とゲオルグを囲む魔族達は心を合わせてこう思った。――読める訳がない。一つ目巨人に対して何と言う非道ぶりだ。

そして、全く読めない（当たり前だが）ゲオルグに対してジャス

ミンなんかは更にこう告げた。

「心の目まで悪いのね」と。

思い出し泣きで滝のようにそのピュアな眼から涙を流すゲオルグ。
魔王はまたボフンと音をたて二頭身になると肺の奥底から空気を
出して城全てに行き渡りそうな声で怒鳴った。

「ジャスミン・ティード・ガルバロス・ディード・カルマ・サバラク・
アムラーヤ！出てこい！」

「はいはい魔王様」

またもふらりと通路の角から顔を出し、タイミングを見計らった
かのように現れるジャスミン。

本日の陳情、一つ目巨人に視力検査はさせないで欲しいにつきジ
ヤスミンなんかは魔王様にまたも半日コースの説教をされるので
あった。

蛇足。今日は一時的に魔王様が元の姿に戻ったことを喜んだ側近
や宰相らは、魔王様が二頭身に逆戻りと、ジャスミンなんかと説
教半日コースで執務時間がなくなったことをゲオルグ以上に涙した
のだった。

陳情 2（後書き）

なんで魔王様はジャスミンの前ではちびっこなのか…

陳情からの暴露

魔王様は机の上に胡坐をかき、片手に羽ペンを持って書類作業をされていた。ジャスミンなんとかが現れてから騒がしかった魔王城が四日目、五日目と静かで六日目まで静かに終わると何やら嫌な予感までしてくる。

そして迎えた七日目の朝のこと。いつものように朝から仕事をしていた魔王様はその書類を見ておっしゃいました。

「淫魔族のリリスと淫夢族のリリムを呼べ。……全くあの親子は魔族、いや吸血族泣かせな」

それは五日前に出された陳情書。ジャスミンなんとかが現れたのと魔王様が二頭身になったことが原因で現在職務が滞りがちなので書類が遅れているのだ。

陳情書を魔王様が読み「またか」と呟く。

問題の魔族は淫魔族、淫夢族で、ともに食料が他人の淫気。つまり他人のエロい気なのだ。

淫魔族のリリスと淫夢族のリリムは種族は違えど親子である。リリスと夢魔オルフェの娘のためリリムは両方の血統を引いた淫夢族となったのだ。リリスとリリムは親子だからか、好みがよく似ている。基本的には吸血族がお好みで度々吸血族に絡むのだ。現在、吸血族一のいい男ベラルクとその息子ミラルクをターゲットにしているらしい。ベラルクとミラルクは吸血族の中でも血統が純血に近く、力も強いので純血種の吸血族の側近の配下にあたる。

「……陛下。申し訳ありません。リリス、リリム両名に連絡がつきません」

「連絡が取れないだど？」

「――両名ともリリオスとともにすでに三日程、連絡が取れないようです」

訝しい状況に魔王様の眉間にしわが寄ってしまふ。側近達は泣きそうだ。麗しの魔王様がいかつい顔になってしまわれるのではないかと思うぐらいに縦シワが深い。

「三日……三日……サルニカ。ジャスミンんとかが城に来なくなつたのは？」

現吸血族の長サルニカが答える。

「四日目にございます」

「リリース、リリムの興味を引いたか……面倒な奴め」

一つ目巨人に視力検査はやめよう事件以来の魔王様の怒声が魔王様の魔力に呼応して魔界全土に響いた。

その内容は勿論。

「ジャスミン・ティード・ガルバロス・ディダ・カルマ・サバラク・アムラーヤ！出てこい！」

そして、すぐにどこからともなく、少し切羽詰まった声だけが魔王様の元に帰ってきた。

「今、クライマックス。ちょっと待ってて」

魔王様は眉間を揉みながら「何をしている。何を……」と脱力したとかしなかったとか。

「お・ま・た・せつ！」

「ま、魔王様あお召しにより」「参上しましたあ……も、申し訳ありません……」「淫魔と言つのに」

魔王様の怒声の後、しばらくしてジャスミンはそれはそれはスッキリとした表情で現れた。その後を追うようにヨロヨロとした足取りで三人の魔族が現れた。

「リリス、リリム、リリオス、魔王様のお召しに参上しないとは……」

魔王様の側近でリリス、リリオスと同種のサリティンが説教しようとして途中でやめた。

「そなたらどうしたのだ？」

三人の魔族達は精気を吸われ切ったようにげっそりとしていた。

「サリティン様……私、快楽の極みをみてしまいました」

三人は恍惚な表情のままその場に崩れた。

「ジャスミン……説明しろ」

「三日間耐久セ」「もういい……いや、リリオスは分かるが他の二人は」

「それは女体化も男体化も自由だからあ。ちなみに一部変更も可。この体、高性能なんだよね。陛下も試してみない？」

魔王様のお顔に聞かなきゃ良かったと浮かんでいる。

「断る。何のためにこの姿でいると思っっているんだ」
そこで側近一同の中であの巨大物体襲来直前の「嫌な予感がする」と現状の二頭身が繋がった。

「お前の相手していた奴らはこんなんでも要職にあってな、仕事はただでさえ滞っているのに更に滞るではないか」

「じゃあ元に戻ればいいのに」

魔王様の二頭身が仮の姿と言うことをジャスミンは知っているらしい。

魔王様はとっても嫌そうに顔をしかめた。

「寝台から出てこれない予感しかない。第一、お前らは我ら地上に住まう者よりも圧倒的に強いではないか。大魔王種として認識されておるのだからな」

大魔王の言葉に歳がいった者達が震えだす。それを年若い者が不思議そうに見ていた。

「三代前の魔王の時、今回と同じようにこいつみたいなのが現れてな、毎日酒池肉林に乱交で魔界が乱れに乱れた。魔王と言うもの自体、世界をまとめる制御装置だ。人間界と魔界のバランスさえ取れていれば荒らぶる魔王が現れたりせず、我のように面倒くさがりが魔王として生まれるのだ。当時の魔王も我と同じで面倒くさがり。魔界が乱れに乱れ、その宇宙人が人間の国の姫達を攫い、さらに面倒くさいことが起きた。あまりに収拾がつかない事態で世界は人間界対魔界の大戦争。迎えに来た宇宙人は当代魔王と一計を案じ、人間界側の勇者として大魔王状態の同僚を連れに来たと言うのが真相だ。……………つまりそいつは大魔王だ」

長い説明すら魔王様にとって面倒で仕方がないが、注意喚起の意味も含めて、この場にいる者に説明をした。

これは大魔王襲来だったのかと周囲の側近一同がジャスミンから離れる。

「それは禁止事項だからやらないよ。一時的な快樂で遊ぶことはしてもね」

「しばらく淫魔族を貸してやるから、迎えが来るまでそいつらで遊んでいろ。サルニカ、サリティンの元にしばらく部下をやれ。サリティンは稼働できる淫魔族を全てジャスミンにあてがうんだ」

サリティンは青ざめて人身御供と呟き、サルニカはこれも魔界の平和のためと御意と頭を下げた。

「えー！ 淫魔族飽きたあー巨人族で楽しみたいー」

「巨人族は駄目だ」

「淫魔族に飽きただどー！！ よし！ 淫魔族の総力を魅せてあげよ

うじゃないですか」

淫魔族のサリティンはジャスミンの腕を掴み、魔王様の執務室から意気揚々と出ていった。

「サリティンの馬鹿め、お前まで参戦したらお前の仕事の穴を誰が埋めるのだ」

魔王様はがつくりと膝をついた。それからギギギと音がつきそうな動きで吸血族の長サルニカを見てニヤリと笑った。

「淫魔族が抜けた穴、吸血族が頑張れ。そして吸血族の警護担当は全て巨人族で埋めるんだ……それから」

ぼふんとピンクの煙とともに魔王様が素敵な八頭身に戻られた。

「淫魔族が全員倒れるまでは仕事が捗る。面倒ごとは回避できるだろ」と鼻歌が出そうな勢いで魔王様はペンを手に取る。

サルニカは泣きそうになりながらも部下達に連絡をとり、次々に指示を与えていった。

その後はもちろん魔王様の執務室は書類で埋まったのだった。

陳情からの暴露（後書き）

だから魔王様はジャスミンを最初から受け入れていたのです。だって勝てないって分かってるんだもん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3159y/>

魔王様と宇宙人

2011年11月21日17時24分発行